

の學問的榮譽を擔ふものであらう。——本書は、國民精神文化研究所助手筒井清彦氏が、廣く山鹿素行の遺著を調査せられた結果國民精神文化文獻として此の度同研究所より公にされたものであつて、收むる所は五種七編、全部未刊の重要史料である。

○「原源發機」及び「原源發機諺解」は共に素行の門下として教を受けた津輕藩主信政が書寫し、素行自ら之れに批點を施したもので、現在津輕伯爵家に所藏せらるゝ右原本を底本として、他に中山久四郎氏所藏の長嶋元長（萬延の頃素行の文庫に當つた平）筆寫本を以て校合し、且平戸、山鹿家所藏の素行自筆本と思はれるものを參考としてゐる。此の二編は素行晩年の述作にかゝり、朱子學に於ける太極、理氣之説の如く、聖學と稱する彼の學問に形而上學的根據を與へたものであるが朱子を以て自ら空理字遠と論難した彼の思想體系も亦、斯かる構造を有してゐた點は特に注目すべき事であらう。尙本書附録には、右二編の解説書とも言ふべき前記長嶋元長の述作「原源發機私淑言」（中山久四郎氏所藏本、改題名）をも收録して理解に便ならしめてゐる。

○「謫居隨筆」は素行の自筆と云はれる惟楊庫本及び中山氏藏長島本を以て校合したものであつて、題名の示す如く、赤穂論居中の著作と考へられてゐる。その内容は「中朝事實」「謫居童聞」等に匹敵するものであるが、特に我國に於ける文武關係を論じた武徳論、及び日本主義の論理的根據をなす水上の辨は、彼の學問の本質を究明するに當つて考慮すべき重點であらう。

○「正誠舊事」「齊修舊事」「治平舊事」の三編は、もと大學の八條目に基き、誠意正心、修身齊家、治國平天下の舊事を編述した三部作として收録されたものである。前二者は、支那古聖賢の言行を經典によつて披尋、編纂したものであるが、後者（別名、治平要録）に於ては、廣く内外の舊事に據つて治國平天下の要諦を論じ、太古以來の歴史的事實を取つて我國の政治體制に關する意見を表明してゐる點は、是亦、彼の學問の本質の何處に在るかを示すものである。而して又、前二者は自筆惟楊庫本を底本とし、後者治平要録は素行の眞蹟と言はれる惟楊庫本（一部異筆）及び平戸、山鹿家所藏本（同前）を底本とし、中山氏所藏長嶋元長本を以て校合したものであり、且右三編の著作年代は不明であるが大體晩年の述作と考へられてゐる。

以上本書の收録せる諸編は、既刊遺著に比すれば大體晩年の著述に屬するものであるが、本書の含む内容は、彼の武士道論を中心として、今後の素行研究に新たな示唆を與へるであらう。（東京國民精神文化研究所發行、非賣品、菊版洋裝、本文六九八頁、解説七五頁、寫真版三頁五葉）（内藤）

新 北 海 道 史

北 海 道 廳 編

本書は其の序言によれば、前に開道五十年記念事業として道民の要望により大正四年頃より編纂事業を開始したが、種々の事情

により蹉跌を重ね爾來二十數年間を経過したが其の後新に北海道史編纂班を置き、地方誌編纂には夙に令名ある牧野信之助氏編纂長となり、以下森川島編纂員、高倉勲託等の職員を置き、銳意史料の蒐集と史事の検討を行ひ、此處に新撰北海道史全七卷中、第一卷概説第五第六史料編の刊行を見た事は誠に慶賀に堪へない。特に從來一貫せる歴史を持たぬ、新開地たる北海道に於て其の感を深くするものである。以下既刊三卷に付簡単に解説する事とする。

第一卷概説は第二卷より第四卷に至る、通説一乃至同三に對する概括的な記述により簡単に北海道史の綱要を示さんと試みたもので、全卷を「第一章渡島と大和朝廷」の古代より、第十章「明治末期より大正へ」の最近世迄を十章に分ち記述し、五十の圖版は、隨所に挿入されて記述の理解を補つて居る。

第五卷史料一。本卷に於ては、道史編纂の際に史料として採用した物の中、重要な物を採録する事としたもので、「福山祕府」六十卷(中大半を缺く)休明光記及び附録、二十七卷、休明光記遺稿、十卷、及び蝦夷地御開拓諸御書付諸御書類等を收めて居り、是等の諸書は何れも江戸幕府時代の優秀な史料である。本卷の編次並に異本對校等は高倉勲託の手になつたものである。其の各に就いて簡単に説明すれば、

① 福山祕府六十卷は、松前藩の家老松前廣長が、藩主道廣の命により、安永五年十一月編纂に着手し、同九年十二月脱稿した、松前藩史料の大集成であるが、残念な事に、第三十二卷以下及び第二、第四、第七、第九、第十、第二十二、第二十三の各卷を

缺く。

② 休明光記、及び附録は、寛政十一年蝦夷地取締御用掛(後蝦夷奉行、改めて、松前奉行)に任ぜられ、文化四年退職迄蝦夷地經營の任にあつた、羽太正義の著で、其の在任中の記録であり、附録は、本文を補ふ爲に奉行の手限物を主とし、重要文書、函館御用所、江戸會所より差出した文書を集めた、當時の蝦夷地公文書の大集成で、前幕府直轄時代の重要記録である。

③ 休明光記遺稿、十卷は、嘉永七年函館の一學者後齋如水事龜屋七郎右衛門が休明光記附録にもれたものを得るに従つて、集めた「蝦夷が千島」以下三十項目に分つて記述したものである。

④ 蝦夷地諸御書付、御書類は、文久二年五月、老中水野忠清より函館奉行に對し命ずる所あり。在府奉行勝田充萬等が旨を當時、函館在勤の糟谷義明に通じて意見書並に蝦夷地開拓經過を編んで奉つたもので、後幕府直轄時代の重要記録である。

第六卷、史料二。本卷には、前卷に引續き、明治維新以後の重要な史料特に開拓に關係ある物を主として採録したもので、明治二年七月七重村開墾條約書、開拓使顧問「ホラシケブロン」報文以下數多くの物を收めて居る。尙本卷の編次等は牧野編纂長之に當り森編纂員之を助けたものである。以下其の二三に付説明する事とする。

① 明治二年七重村開墾條約書は、明治二年、當時函館在任の李國商人、ガルトネル (R. Gaultner) が、有司に縁因して、七重村の耕地三百萬坪租借に關する條約文で、是はガルトネルより買収せる原本に依つたものである。

③ 開拓使顧問「ホラシケブロン」報文は、黒田開拓使次官により

明治四年米國より招聘され、教師頭取顧問 (Commissioner and Adviser) として、數多の同國技師を指揮して開拓に努力した米人ホラシケブロン (Horace Capron) が、其の在任中 (1871—1875) に或は報文の形に於て、或は開拓使主腦者宛書狀の形式に於て自己の開拓に關する意見を發表せる物、及び彼のブロックに屬せる外國技師達の報文をも合せて、其の滿期歸朝の際、一括して開拓使當局に屬して一冊の報文集として校刊せしめ

た、是即ち (Report and Official Letters to the Kurakushi by Horace Capron, Commissioner and Adviser, and his Foreign Assistants.) であつて全部歐文である。之を外事課で翻譯せるもので、總言教師頭取兼顧問「ホラシケブロン」書信。博士「ウキアム・ビブレキ」報文摘要以下五十餘に分れた物を收めて居る。尙本書は、最初は歐文の物をも併せ採録する考への所頁數の都合上割愛したとの事である。

尙本卷には、次の如き諸種の計畫、或は建議、具申書等が收められて居るが此處では單に名前を擧ぐるに止むる。即ち「西郷開拓長官建議」(明治十五年一月)、「北海道三縣巡視復命書」(明治十八年)、「岩村長官施政方針演說書」(明治二十年五月)、「北垣長官北海道開拓意見具申書」(明治二十六年三月)、「北海道十年計畫の大要」(明治三十二年—三十三年五月)、第一期北海道拓殖事業計畫說明書 (明治四十二年歟)、第二期北海道拓殖計畫說明書 (昭和元年歟) 及び北海道國有未開地大地積貸下貸付表。以上が第六卷收録のものである、是により明治初年より昭和の今日迄の北海道

拓殖の主要なる物を殆んど網羅せるもの、やうである。以上 (既刊三冊、菊判、第一卷、二七七頁、圖版五十、第五卷一、五四六頁、圖版十五、第六卷一、〇六四頁、圖版三、非賣、北海道廳編) (田中)

東洋歴史大辭典 第一卷

、平凡社發行 四六倍大判 五三〇頁

明治中期以來我が國に勃興した東洋史學の研究は、爾來着々として進歩發展の一路を辿つて來たが、友邦滿洲國建國後はその進展の勢益々著しく、專攻者の數は愈々多きを加へ、その研究は益々廣く研究の成果より見るも遙かに他の諸國のそれを凌駕するに至つたことは實に慶賀に堪へない次第である。東洋史學界の隆盛に拍車をかけた滿洲帝國の出現は、又我が國人をして東洋に於ける我が國の地位を認識せしむるとともに、東亞一般に對する注意を深からしめ、東洋の歴史を知つてその現勢を理解せんとの慾求は澎湃として我が讀書人の間に起つて來た。今や東洋の歴史はひとり専門史家の研究の對象であるばかりではなく、廣く一般知識人の關心の繫る所となつてゐるのである。然るに東洋史に關しては、從來適當なる入門書がなかつた爲めに甚だとりつきが惡く、また專攻者にしても字句の難解の爲めに昏迷挫折することも一再ではなく、正確にして幽密なる内容を有する指導書の出現を望むこと切なるものがあつた。今向平凡社より出刊せられた東洋歴史大辭典は實にかゝる期望に副ふべく編纂せられたものである。